

## 種豚改良技術確立試験

藤木美佐子・吉田繁樹・相馬由和・大石仁

Establishment of Improvement Technique for Breeding Swine

Misako FUJIKI, Shigeki YOSHIDA, Yoshikazu SOMA and Hitoshi OHISHI

### 要 約

現在の肥育豚は LW・D の三元交雑が主流となっており、その基礎となるランドレース種は非常に重要であり、高い繁殖能力、発育能力、優良な資質が求められている。

このため、優良なランドレース種豚を作出し、県内の養豚農家に種豚の配布及び精液の譲渡を行うとともに配布先農家の繁殖能力や産肉能力の情報を得ることにより広域的な改良増殖を図る。

2009 年度は 37 腹の分娩で子豚 402 頭を生産した。育成豚 114 頭を払い下げし、精液は 3 頭分を譲渡した。  
キーワード：ランドレース、改良増殖

### 材料および方法

### 緒 言

我が国へ最初にランドレース種が導入されたのは昭和 35～36 年である。まだ大型品種が普及していなかった当時は飼養管理の難しさや繁殖障害が多く出るなどの理由で敬遠されることもあったが、品種の特徴が理解されたことや高い産肉能力により急激に増加し、中ヨークシャー種やパークシャー種等の中型種からランドレース種をはじめとする大型種へ飼養形態が移行する先がけとなった。

その後、改良が進み日本に定着したランドレース種は三元交雑の基礎となる種雌豚として広く用いられるようになった。昭和 50 年代以降はデュロック種が止め雄として普及し、現在でも LW・D の三元交雑が肉豚全体の 8 割近くを占めている<sup>3)</sup>。

三元交雑におけるランドレース種の役割は F 1 母豚生産であり、基礎となる部分である。そのため、高い繁殖能力、産子の発育能力、強健性を子豚に伝えなければならない。

高い能力のランドレース種を増殖・配布することは、養豚経営の安定向上に大きな影響を与えるものと考えられる。

この試験は当研究所の外から優良な種豚や精液を導入してさらに優れた種豚を作出し、それを県内の農家に払い下げることにより、広域的な改良効果を生み出すことを目的とする。

### 1 供試材料

種豚改良に用いた種豚は以前から当所で飼養していたランドレース種。

基本計画としては常時、種雌豚 20 頭、種雄豚 5 頭を飼養し、これらの豚を用いて改良増殖を実施した。

### 2 調査項目

#### 1) 繁殖成績

生産頭数、1 腹当たり哺乳開始頭数、離乳頭数、離乳時育成率、生時体重、3 週齢体重

#### 2) 産肉成績

一日平均増体重、ロース断面積、背脂肪

### 3 育成豚の選抜

検定成績、体型並びに肢蹄の状況等を考慮して行った。

### 4 種子豚及び育成豚の払い下げ

種子豚は 4～5 ヶ月齢、育成豚は 7～8 ヶ月齢で行い、精液の払下げは、随時実施した。

### 結果および考察

繁殖成績については、37 腹分娩し 402 頭の子豚を生産した。1 腹当たり哺乳開始頭数は 9.7 頭であった。離乳子豚数は 348 頭で育成率は 96.7% であった。また、子豚の生時および 3 週齢時平均体重は、それぞれ  $1.43 \pm 0.36$  k g と  $5.55 \pm 1.20$  k g であった(表 1)。

表 1 繁殖成績

年度	分娩腹数 (頭)	生産子豚数 (頭)	哺乳開始 頭数 (頭)	1 腹当たり 哺乳開始頭数 (頭)	離乳子豚数 (頭)	育成率 (%)	生産子豚 平均体重 (kg)	3 週齢時 平均体重 (kg)
2007	18	157	145	8.1	139	95.9	1.44	6.17
2008	21	221	209	10	189	90.4	1.46	5.16
2009	37	402	360	9.7	348	96.7	1.43	5.55

産肉成績については、現場直接検定により、雄 3 頭及び雌 14 頭を実施した。

雄 3 頭の直接検定成績の平均は、1 日平均増体重は 903.4 g、ロース断面積は 26.4 c m<sup>2</sup>、背脂肪層

の厚さは 1.6 c m であった。

雌 14 頭の直接検定成績の平均は、1 日平均増体重は 809.2 g、ロース断面積は 24.2 c m<sup>2</sup>、背脂肪層の厚さは 1.6 c m であった (表 2)。

表 2 産肉成績

年度	♂				♀			
	検定頭数 (頭)	一日平均 増体重 (g)	背脂肪 の厚さ (c m)	ロース 断面積 (c m <sup>2</sup> )	検定頭数 (頭)	一日平均 増体重 (g)	背脂肪 の厚さ (c m)	ロース 断面積 (c m <sup>2</sup> )
2007	3	880.6	1.7	30.4	12	784.3	1.7	30.5
2008	3	957.7	1.6	29.6	14	771.5	1.6	27.0
2009	3	903.4	1.6	26.4	14	809.2	1.6	24.2

育成豚は、県内の農家 11 戸に対し、計 114 頭 (雌 114 頭) を払い下げた。精液は、農家 2 戸に 3 頭分を譲渡した。

今回、繁殖成績は全国平均<sup>1)</sup>と比較したところ、一腹あたり哺乳開始頭数がやや低い成績であったがその他は同等か良好な成績であった。産肉成績については、当所における過去の成績<sup>2,4)</sup>と比較すると雄、雌とも一日平均増体重については、やや高い成績だったものの、その他の成績については平均並みかやや低い成績であった。今年度は夏場に出産直後の圧死による事故が多かったため、分娩前後の管理を留意するとともに、豚の能力と血統 (系統) との関係进行调查し、選抜改良を進める。

種豚改良技術確立試験, 茨城畜七研報 41 45-46

#### 参考文献

- 1) 社団法人 日本養豚協会 養豚基礎調査全国集計結果 (平成 21 年度)
- 2) 中村妙, 吉田繁樹, 相馬由和, 大石仁, 2009, 種豚改良技術確立試験, 茨城畜七研報, 42, 67-68
- 3) 日本の養豚 編集部 (2000) 本誌に見る養豚 50 年の歩み 日本の養豚 2000 年 1 月号
- 4) 三浦成見, 海老沢重雄, 相馬由和, 大石仁, 2008,